

# 第122回 『女のためいき』の衝撃

## 猥褻感を誘発させた

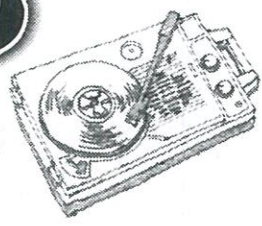
あれは私が中学3年だった昭和41年7月、ビートルズ来日騒動の直後、1学期の期末試験の最中だったでしょう。翌日にも試験があるため部活をせずに午前中で帰宅、翌日のための試験勉強もせず、茶の間のテレビで無名の歌手が出てくる歌謡曲のスポーツ番組を見ていたとき、ブラウン管の中に現れたのは『女のためいき』を歌う18歳の森進一でした。

曲名にある「ためいき」が、失恋した女性から発せられた「未練の嘆息」だということは歌詞を聞きとればすぐわかることですが、この歌を初めて耳にして興奮してしまったせいなのか、私は「ためいき」を「失神のあえぎ」と明らかに混同し、テレビを見ている自分とあまり変わらない年代の若者が性行為を想起させるこんな歌をテレビに出て歌ってしまっているのか、などと余計な心配までしつつ、食い入るように画面を見続けていました。

### 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いままで

堀井六郎  
絵・松本 浦



たのでしようが、大人だけでなく思春期の中学生にまで衝撃を与えた問題作は、目論見どおりまたたく間に

日本中に知れ渡ることになります。

森がデビューする前年の昭和40年頃から、バーブ佐竹『女心の唄』、大下八郎『おんなの宿』、菅原洋一『知りたくないの』、城卓矢『骨まで愛して』、美川憲一『柳ヶ瀬ブルース』など、ビクターを除くレコード各社がそれぞれ「無名の男性歌手が歌う女心」のレコードを次々にヒットさせていきました。後れをとっていたビクターはアイドル系の容姿を持つ未成年の森に女心を託しますが、曲名・歌詞に加え、若手作曲家にも衝撃的な旋律を求めます。

歌詞より先にメロディーが提供されたようですが、この曲の最大の聴かせどころの「嘘と知らずに信じていたう、ああ、あつあー」のためいき部分が歌詞より先にできていたとすると、当時28歳だった作曲家・猪俣公章の才能やひらめきにいまさらながら敬服します。



デビューする3年前、森は中学卒業直後に鹿児島から集団就職で大阪へ向かいますが、

歌手として世に出します。のちの数多くの名曲を量産することになる猪俣公章と、喉の犠牲を払って「嗚咽唱法」を開拓し、今年6月に歌手生活55周年を迎える森進一、『女のためいき』は二人の若い逸材を世に知らしめた歴史に残る昭和歌謡です。